

悦楽の園——蜜蜂の飛交う豊かな土壌

千葉敏之

閉じられた園だ。ぼくの妹、花嫁よ。閉じられた池、封じられた泉。君の若枝は、よりすぐりの果実をつける柘榴ざくろの遊園。(雅歌、六章四節)

旧約聖書は、じつに多彩な文書群から成り立っている。《創世記》は、天地と人間、水陸の動物を創造する六日間を描き、多言語の起源となった《バベルの塔》、人類の種族の起源となる《ノアの洪水》を物語る。《創世記》を含むモーセ五書は、アブラハムが神と契約し、イスラエルの民が約束の地カナンへと導かれ、律法に基づく社会を築いていく黎明期の歴史を綴る。モーセ死後の王国の建設、ダビデ、ソロモン王の栄華、王国の分裂・滅亡とバビロン捕囚までの歴史は、《ヨシヤア記》、《士師記》、《サムエル記》、《列王記》の歴史書が引き継ぐ。《イザヤ書》、《エレミヤ書》、《エゼキエル書》等の預言書は、王国の分裂と滅亡を経てバビロニアに捕囚されたイスラエルの民に、契約からの逸

脱を悔い改め、ヤハウエに回帰するよう説く、市中の預言者たちの言葉である。

契約と律法、「神」対「民」の対峙の歴史を基調とする旧約聖書にあって、「諸書」に分類される文書群はひときわ異彩を放っている。義人ヨブが不可解で過酷な試練の果てに「滅びよ、私が生まれた日」とおのれの出生を呪う《ヨブ記》。「私の息子よ、お前の父の教訓に聞き従え」と、王たる者の資質を愚者との対比で諭す《箴言》。人生を「空の空」と達観する《コヘレト書》。この世の終末劇を幻を通じて天使が示す、黙示文学の《ダニエル書》。これらの文書は、王国の滅亡を歎きつつ、捕囚の生活に苦しむエルサレムの人々、故郷の町への帰還と神殿再建を願う人々の胸中に滾る悔恨の情が産み落とした言葉である。

私の内臓は煮え返る。
わが民の娘の破滅の故に、

私の肝臓は地に注がれる。(哀歌、二章一二節)

《哀歌》は、彼らの自責の念をこう呻く。

この悲痛の対極にある文書が、《雅歌》だ。賢王ソロモンの作とされてきた、僅か八章の「歌々の中の歌(最高の歌)」は、教父オリゲネスによれば、「祝婚歌、すなわち婚礼を寿ぐ歌」であった。若き男女の官能的な言葉の掛け合いは、生真面目な教父の目にはあまりに露骨であったのか、信徒と神、キリストと教会との間の「婚姻」の寓意と解釈されてきた。冒頭引用文の「閉じられた園」は処女性を象徴し、やがて処女懐胎の聖母マリアと結び付けられる。パリ・クリュニー中世美術館所蔵の著名なタピスリー《貴婦人と一角獣》はこの表現伝統に連なるが、そこには動物寓意譚における一角獣のイメージと、五感——視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚——の寓意が重ね合わされている。

私の愛する人の声、
ほら、あの人が来る。

山々を飛び越えて、

丘の上を飛びはねて。(雅歌、二章八節)

若き男女が恋の病に身を焦がし、羚羊や雄鹿のごとく欣喜雀躍し、やがて結ばれて婚礼の時を迎える。《雅歌》は、こうした人間の澁澁とした若き日々を、五感を研ぎ澄ませた——香油ナルドの芳醇な匂い、黒々と艶やかな髪の房、指を滴

る没薬の感触——歌い上げる。

かつてアダムとイヴが住んでいた地上の楽園パラダイス。《創世記》に神を裏切る人の原罪は描かれるが、若き二人が紡いだはずの愛や、墮罪前の楽園——「閉じられた園」——での幸せな暮らしは綴られない。《雅歌》の男女をアダムとイヴに重ねると、律法的な旧約の硬直的な世界像の向こうに、感情豊かで柔和なもう一つの世界像が立ち現れてくる。

旧約の諸書は、時系列を守りながら、《意味の相補性》の関係にある。何に何を重ねるか、知恵を引き出す無限の可能性が潜む。《雅歌》はいわば、神の叡智と生命力あふれる《悦楽の園》への窓。キリスト教ヨーロッパは、花々の蜜を集めて回る蜜蜂のごとく、人間の生のすべてを集撮する《古典》から、成熟のための養分を蓄えていたのである。

ちは・としゆき 総合国際学研究院教授 ヨーロッパ中世史

文献案内

オリゲネス『雅歌注解・講話』小高教訳、創文社、一九八二年

『旧約聖書Ⅰ〜Ⅳ』旧約聖書翻訳委員会訳、岩波書店、二〇〇四〜

二〇〇五年

